

## エスパー魔美—コンポコとは何なのか—

総合人間学部 4 回生 森京実

『エスパー魔美』という作品を、そしてそこに出てくるキャラクター「コンポコ」をご存知だろうか。コンポコは藤子・F・不二雄による漫画作品『エスパー魔美』に登場するペットの犬だ。『エスパー魔美』とは藤子・F・不二雄が1977年から1988年にかけて当時の少年誌、『マンガくん』『少年ビッグコミック』で連載していた連載漫画である。ストーリーは、平凡な少女佐倉魔美がある日超能力に目覚め、数々の事件に立ち向かっていくというもので、藤子F先生の代表作に数えられることも多く、今でも根強いファンがいる。私自身エスパー魔美という作品には並々ならぬ思い入れがあり、全巻買い揃えることはもちろん、アニメ映像をYoutubeで違法視聴、ありとあらゆるグッズ収集と思いつく限りのファン活動をしてきた。そうして何度も繰り返し作品に触れるうち、どうしても避けて通れない問題にぶち当たった。それが、表題の「コンポコとは何なのか」である。

コンポコがどういう存在なのか軽く説明しておく、『エスパー魔美』の主人公佐倉魔美の飼い犬(?)である。容貌が特徴的で、一見するとタヌキのようでそれでいてキツネやネコっぽさもある。鳴き声も普通の犬とは程遠く、ファンファンとどう発音すればよいのか分からない声で鳴く。この奇抜さは折り紙付きで、主人公の佐倉魔美の隣人の隠木さんには「雑種犬」と散々な言われようだし、高畑さんからも「どうみてもキツネかタヌキ」と言われている。とにかく変な犬なのである。

コンポコはその愛らしさでも特筆に値する。タヌキかパンダのような目元はなんとなく困っているように見え、不憫な感じがする。不憫といえば魔美の彼に対する扱いはぞんざいで、うっかりご飯を抜かれたり、殺人的な手料理を食べさせられそうになったり、よく踏まれていたり結構ひどい。おだてにも乗りやすく、嫌っていた相手でも褒められればすぐなびく。油揚げが大好物というこれまたキツネみみたいな好みも愛らしい。

では何が問題なのか。マスコットのキャラといえばそれまでなのだが、どうもそれだけではない意味がありそうだ。ここでは他のF作品と比較することでコンポコの謎を紐解いていきたい。

まず、コンポコにははっきりいって特殊能力がない。風変わりな容貌と、愛嬌にこれといった特技がない。他の作品をみると、言わずもがなドラえもんは未来から来たネコ型ロボットであり、ありとあらゆる夢を叶える道具が出てくる4次元ポケットを持っている。『エスパー魔美』と読者層が同じ『T・Pぼん』に目を向けると、ぶよん(黄色いゼリーのよう生き物)には異空間に生息する特殊生物という特別な属性があり、加えて透明になれる。他の主要作品を見てみても、チンプイには科法が使えるし、モジャ公は無限の胃袋を待つし、モンガーは頭がいいしというように皆何かしら特別で一芸を持っているのである。言い換えれば日常生活に溶け込むには「すこし不思議」以上だ。ここでコンポコの異質性が際立ってくる。コンポコは『エスパー魔美』の世界では変わった犬と紹介されるが、それは犬としてその世界に普通に存在してしまっているということでもある。すなわち、上述した他作品の面々と比べてしまうと普通すぎるのである。

ではなぜ、コンポコは特殊能力を持たない、容貌が風変わりなだけのただの犬なのだろうか。端的に言ってしまえば、それは彼が登場するのが『エスパー魔美』という作品だから、といえるだろう。彼が登場する作品『エスパー魔美』の主人公は彼の飼い主の佐倉魔美という14歳の少女だ。コンポコは脇役にすぎない。作中では彼女が超能力者だということが描かれている。エスパーという強すぎるSF成分が他の人物のSF化を防いでいるといっている。なぜなら、エスパー魔美の特異性を際立たせるためには他の脇役たちには普通になりきってもらわなければならないからである。『エスパー魔美』は心優しい少女の人助けと成長を描いた物語だが、それ

と同時に超能力者としての孤独と向き合う物語でもある。

しかし、それだけと言えるのだろうか。あれだけ他作品のマスコットのキャラが特殊能力・属性を持っているにもかかわらずコンポコは本当にただの犬なのだろうか。実はコンポコには地味でも重要な経歴がある。それは、彼が嵐の夜に突然佐倉家に迷い込んできたというものだ。そしてそれは佐倉魔美が超能力を発現する前の話だ。つまり、主人公の魔美がエスパーに目覚めたのはコンポコが迷い込んできて程なくしてという可能性もあるということになる。コンポコは物語の初期では「まだ仔犬」と紹介されているし、一家の中で妙に序列が低いのもやってきて間がないと考えれば説明がつく。魔美からの多少ぞんざいに見える扱ひも、ペットに不慣れた中学生の言動と考えられなくもない。もし実際にこのような時系列でコンポコが佐倉魔美のもとに現れたのだとしたら、彼女の超能力とコンポコとの間に何らかの因果を見出すことはできないだろうか。つまり、コンポコがやってきたからこそ、普通の少女だった佐倉魔美はエスパーになったとすることはできないだろうか。

コンポコの正体についてももう少し迫ってみよう。その手がかりとして最も有力なのがキツネとタヌキというキーワードだ。コンポコが似ているのはもちろん、どちらの動物にも「化ける」伝説があり、超常現象とも親和性がある。時代を遡ると古代中国の伝説では「九尾狐狸(きゅうびこり)」の話がある。これは九尾のキツネの別名で、「狐狸」とあるのは、一説にはもともと中国ではキツネのことを「狸」とも「狐」とも呼んでいたかららしい。それが日本に輸入された際に分裂し、「狸」という呼称が現在のタヌキに充てられるようになったという。そこから日本ではキツネ同様タヌキも化ける力があるという伝承が伝わったようだ。強引だが、キツネの耳としっぽを持ち、タヌキのような顔をしたコンポコにぴったりの名称ではないだろうか。九尾のキツネ伝説にはさまざまなバリエーションがあり、妖術を用いる、人間に化けて悪さを働くなどをはじめとして吉兆をもたらす神獣だというものまでいろいろある。日本にもやって来て玉藻の前という女性に化けて時の帝をたぶらかし、安倍晴明に石にされたというものもある。またキツネやタヌキ自体にもかなり古い時代から信仰のようなものが存在しており、キツネはネズミを獲る益獣だったことから稲荷大明神に見られるように広く信仰されている。タヌキにしても信楽焼や、各地に点在する祠などからその信仰を見ることができる。

タヌキ、キツネへの信仰で共通するのは、自然界と人間界を結び利益をもたらす能力である。実際に稲荷神社のキツネは異界への門の機能を持つとも言われている(松村潔『日本人はなぜ狐を信仰するのか』に詳しい)。このようなことを考慮すると、嵐という自然の脅威を潜り抜けて魔美のもとへとたどり着いたコンポコが、彼女に何らかの力をもたらしたとしても不思議は少ないように思う。コンポコが魔美の超能力の発現条件だったのか、はたまたキツネとタヌキという記号を用いた超能力の扉を暗示しているのか、コンポコが物語の根幹に関わるキャラクターであることは確かだろう。

それゆえに『エスパー魔美』全編を通してただのペットに過ぎないコンポコは存在感を放ち続けているのだと思う。高畑和夫というコーチかつ相棒のような役割のメインキャラクターがいながら、ペットという距離感で魔美を守り、そばにいる。それは魔女にとっての使い魔的位置と違ってよく、パートナーとしては高畑さんより一枚上手だ。それどころか、ひょっとすると『エスパー魔美』の真の立役者はコンポコかもしれない。魔美のキャラクター性の多くを占めるエスパーであるという特性と切っても切れない関係にあるコンポコがいなければ、『エスパー魔美』は誕生し得ないからだ。コンポコは決してサブキャラクターではない。彼なくしては物語が成立しないほどの秘密を持った、『エスパー魔美』の核であり心臓なのだ。この拙文を閉じるにあたって、冒頭の問いにもう一度答えておこう。コンポコとは何なのか？『エスパー魔美』そのものである。